告白1

高橋玄
映画監督

人間は組織の歯車
なんかじゃない。

高橋玄（たかはしげん）映画監督

１９６５年12月４日、東京都新宿区生まれ。マンガ家を志し、高校在学中に、ちばてつや賞（講談社）入賞。１９８５年、映画界へ転向し、東映東京撮影所装飾部からキャリアをスタート。１９９２年、『心臓抜き』で脚本、監督、編集を手がけてデビューする。監督作品に、『嵐の季節』（１９９５年）、『突破者太陽傳』（２０００年）、『CHARON（カロン）』（２００５年）、『GOTH（ゴス）』（２００８年）など。

弱い者いじめをする奴ほど、強い者にはこびへつらう

――映画『ポチの告白』の着想を得たのは、いつごろ、どのようなきっかけだったのでしょうか。

高橋　最初に『ポチの告白』というタイトルをつけた作品はコントでした。４～５年前に、数人の若いスタッフが暇をもてあましている様子だったので、勉強させるつもりでつくった寸劇です。交番でお巡りさんが何をするわけでもなく、だらだらしゃべっているというもの。ただし、その内容が、映画の冒頭で出てくる「世の中から犯罪が減ったら、俺たちシノギが減るんだぞ」とか、「何か、おもしろい話ねえの。何か、どっかスケベな女がいるとかさ」というとんでもない会話。お巡りさんが告白する内容が警察の組織犯罪へとふくらんでいき、映画のストーリーが完成しました。

警察官を「権力の犬」とか「ポチ」と思う気持ちはずっと昔からあり、あえて挑発的な、奇抜なタイトルをつけたわけではありません。

――警察官に対して、そういうイメージを持ちはじめたのはいつのことですか。

高橋　いつ、何の事件をきっかけに、というものではないですね。いつの間にか、そう確信するようになりました。

僕はこう見えて、子どものころはいじめられていたんです。非力だったし、ま

交番で手持ちぶさたなタケハチと奈良巡査長が会話している。

わりに合わせることができないたちで、みんなの標的になりやすかったんですね。親も教師も助けてはくれませんでした。

20歳ぐらいで空手をやりはじめてから、（東京都新宿区）歌舞伎町などでよくケンカをしました。そこで、威張っていた奴らの底が知れたというか、化けの皮がはがれる姿を見た。自分より弱い者に対して虚勢を張る奴ほど、強い者にはこびへつらう。社会的な矛盾を感じていても、体制に従順。そんなことを経験して、自分の実力でもないのに威張っている人間が大嫌いになりました。会社でいうと、サラリーマン役員ですかね。創業者でもないのに、やたらと偉そうに振る舞う。そういう奴を見ると、からかったり、ケンカをふっかけたりしないと気が済まないんです。警察官もその1つということです。

いじめられっ子時代から持っていた社会に対する不公平感というのは、成長しても全然なくなりません。むしろ様々な組織でいじめがあり、矛盾がたくさんあることに気づかされました。それらを受け入れて、見た目だけ平穏に過ごそうという性格ではないので、おのずと世の中の主流からはずれていきます。

――現在、歌舞伎町に住んでいるのも、アウトサイダーやアウトローへの愛着からですか。

高橋　べつにそういうわけではありません。もともと新宿生まれで、便利で安全な街だと思っているから住んでいます。